わが国における精神科ソーシャルワーカーの黎明

橋　本　　明

1997年に精神保健福祉士法が成立し、精神保健福祉士が国家資格化された。それから15年が経過して、この専門職は医療や福祉の現場で、一定の位置を占めるようになったと思われる。日本の精神科ソーシャルワーカーの歴史は、精神保健福祉士の国家資格化を推進した職能団体の過去数十年の歴史とも重なるが、それは全体からみればほんの一部にすぎない。本論文は、長期的な展望にたって精神科ソーシャルワーカーの歴史の源流にさかのぼり、この職能集団が生み出され、発展してきた社会的な文脈を解明することを意図した試論である。最初にアメリカにおけるPSWの歴史を概観し、1960年代までの日本の歴史につなげていきたい。

Ⅰ　1930年までのアメリカにおけるPSWの展開

いわゆる精神科のソーシャルワーク、そしてその担い手としての精神科ソーシャルワーカー（PSW, psychiatric social worker）は、20世紀のアメリカで発達した[1)]。古くは1905年、ボストンのマサチューセッツ総合病院（Massachusetts General Hospital）での活動に遡る。当該病院の神経科クリニック（Neurological Clinic）の担当医パットナム（James J. Putnam）が、ソーシャルワーカーのバーレイ（Edith N. Burleigh）に精神医学の専門的な訓練を施したのだという。その後、1906年にはニューヨークのベルヴュー病院（Bellevue Hospital）精神科病棟で、1911年にはニューヨーク州立の精神病院、マンハッタン病院（Manhattan State Hospital）で、1913年にはマサチューセッツ州立の二つの精神病院、ダンヴァース病院（Danvers State Hospital）およびボストン病院（Boston State Hospital）で、ソーシャルワーカーがスタッフとして加えられている[2)]。

他方、1912年に上記の州立ボストン病院では、急性期患者および外来患者に特化した部門として新たにボストン精神病院（Boston Psychopathic Hospital）を設置した[3)]。Psychiatric Social Workの名称が生まれたのは、この病院だと言われる。1913年にはソーシャルサービス部門が活動をはじめ、院長のサザード（Elmer E. Southard）（図1参照）とソーシャルサービス部門の責任者ジャレット（Mary C. Jarrett）の指導のもと、PSWの教育訓練コースが開始された。サザードの死後、1922年に出版されたジャレットとの共著“The Kingdom of Evils”によれば、病院で行っているソーシャルワークは、目新しいものでも、独創的なもので

図1　Elmer Ernest Southard
(1876–1920)
出典：Mental Hygiene, vol. 4 (1920).

もなく、これまでのソーシャルワークとなんら変わらない。ただ、ソーシャルワーカーが精神衛生の分野で活躍することであり、それを Psychiatric Social Work と称しているのだという。病院の多くの医師はソーシャルサービスの開設に批判的だったが、その後の良好な実践結果によって簡単にその批判を退けることができた[4)]。

第一次世界大戦は、PSW の普及に重大な影響を与えた。戦争神経症患者の大量出現などにより、PSW へのニーズが高まったのである。しかし、精神科の訓練を受けたソーシャルワーカーはごくわずかだった。そこで、ボストン精神病院は、PSW の訓練コースを拡充するために、1918年から1919年にかけてマサチューセッツ州ノーサンプトン（Northampton）のスミス・カレッジ（Smith College）[5)]とタイアップして戦時緊急コースを立ち上げた。これが、アメリカ最初となる高等教育機関での PSW の養成となった。50人あまりの卒業生は陸軍病院や赤十字組織の仕事に就いた[6)]。

このコースに参加し、後にスミス・カレッジでソーシャルワーク教育を担当することになったレイノルズ（Bertha C. Reynolds）は、この頃の PSW の役割の議論を回想して、次のように述べている[7)]。1918年の時点では、新しい職種である PSW は、看護婦のように医者のただのアシスタントではなく[8)]、精神医学と社会科学の教育を受けている者である、という認識が明確にもたれていたわけではなかった。それでも、この分野のパイオニアたちは、患者の社会相互関係がますます複雑になりつつある時代の精神医学研究にとって、PSW は大きく貢献すると考えていた。やがて、医師たちは、PSW を単にケース・スタディーに使える情報の運び屋、あるいは治療場面で簡単な使い走りをする援助者というだけではなく、独自の専門的視点を持つ女性の集団[9)]であり、精神科医ができない患者の社会的な調整を行うことができることを認めた、という。このように、レイノルズは PSW という職種の独自性、専門性を主張している。

同様の PSW 養成は、緊急的コースあるいは常設カリキュラムとして、ニューヨーク、フィラデルフィア、シカゴの教育機関、さらにカナダのトロント大学でも行われた[10)]。

さて、PSW が社会的に認知されていく過程で無視できないのは、アメリカにおける精神衛生運動（mental hygiene movement）である。この運動も20世紀のアメリカの産物であり、元精神病患者ビアーズ（Clifford W. Beers）の精力的な活動の成果とも言えるだろう。彼が事務局長をつとめ、1930年にワシントンで開催された第 1 回国際精神衛生会議（The First International Congress on Mental Hygiene）は、アメリカの精神衛生運動のピークを象徴するものだった。会議には世界中の専門家が集まり、精神衛生思想の普及に大きく貢献した。しかし、ビアーズとは誰なのか？

1903年に精神病院から退院したビアーズは、過酷な入院体験から、精神病院での患者処遇の向上、さらには国民の精神的健康の予防や増進をめざして運動をはじめた。1907年にビアーズはアメリカ精神医学界の重鎮アドルフ・マイヤー（Adolf Meyer）に会い、この運動の名称として精神衛生（mental hygiene）という言葉が提案される[11)]。さらにマイヤーらの協力を得ながら、1908年に自らの精神病院入院体験を出版した[12)]。この自伝的書物 “A Mind That Found Itself”[13)] はベストセラーとなり、精神衛生運動に弾みがつく。同じ年、1908年 5 月 6 日、ビアーズが卒業したエール大学からさほど遠くないニューヘイブン（New Haven）、エルム（Elm）通り149番地の古いコロニアル・スタイルの建物のなかでコネティカット精神衛生協会（The Connecticut Society for Mental Hygiene）が設立された。ここが精神衛生運動発祥の地とされている[14)]。ビアーズは早くも翌年の1909年 2 月には全国組織の全米精神衛生会議（The National Committee for Mental Hygiene）の実現にこぎつけた[15)]。精神衛生運動はヨーロッパにも波及し、1920年のフランスにおける精神衛生同盟（Ligue d’Hygiène Mentale）の結成を皮切りに、ベルギー、イギリス、ブルガリア、イタリアと次々に精神衛生運動組織がつくられていった[16)]。そして1930年の第 1 回国際精神衛生会議の開催時点で、この運動はほぼ全世界を覆い尽くしていた。晩餐会の会場であるワシントンのホテル・ウィラード（Willard）には、大小あわせたホールの収容能力をはるかに超えるおよそ1,100人もの参加があった。会議のオープニングを飾る 5 月 5 日の晩餐会では、 6 大陸の参加者代表がそれぞれスピーチをして会を盛り上げている[17)]。本格的な討議は、ビアーズがコネティカット精神衛生協会を設立してからちょうど22年目にあたる翌 5 月 6 日から 5 月10日の午前中までとなっていた。最終日の昼食会が会議を締めくくった。結局、会議の登録者は合計3,042人であった[18)]。会議の事務局長をつとめたビアーズにとって、運動の最大

の成果がここに結実したのである。

実は先に紹介したレイノルズの回想は、第1回国際精神衛生会議での講演内容に基づいている。治療場面におけるPSWの役割をテーマにした彼女の講演は次のように結ばれている。

> 不適応を起こしている個人がいたとすれば、それは同時にその人をめぐる状況（environmental situation）にも問題があることを意味している。だからこそ、訓練を積んだPSWが治療場面で果たす役割があるのであって、それは他の誰にも満たすことができない仕事なのである。そう頻繁にPSWが状況というものを治療することはない（現在の科学的知識はあまりに限られており、多くの状況はあまりに複雑なのである）。けれども、PSWはどのようにしたら周囲の環境からくるプレッシャーを軽減できるかを知っており、そのことによって、患者が精神科医の助けを借りながら自らがそのような状況に対処できるように導くことができるだろう[19]。

このようにレイノルズは、患者個人の内面よりも、患者の社会的環境を変えていくことにPSWの役割があるのだと強調している。もちろん、彼女の意見がアメリカのPSWを代表していたとは言いきれまい。というのも、講演後の質疑応答で、たとえばフィラデルフィアの児童指導クリニック（Child Guidance Clinic）のあるPSWからは「本当にクライエントに問題となるのは、外部の状況（external situation）よりも、むしろ彼らの内部の環境（environment within themselves）である」とのコメントが出ている[20]。アメリカの歴史にはこれ以上深入りしないが、PSWの誕生から30年近くが経過したこの時点においても、PSWの専門性や役割をめぐる議論が続いていたことに注目したい。

II　戦前日本におけるPSWの展開

日本に目を転じると、1928年の『呉教授在職二十五年記念文集』に収められた論文「東京府松澤病院ノ歴史」（具体的な執筆者は不明）の中に、「将来ノ企画」として病院に「遊動事務員」を配置する計画が記述されている[21]。ただし、実際にこの論文が書かれたのは1923年頃と考えられるので、遅くともこの時点までには、PSWに近い考え方が出されていたようである[22]。この発想はアメリカからもたらされたと推察されるが、その経緯は不明である。

「企画」の実現はなかったが、興味深い内容であるので遊動事務員の全記述を以下に掲げたい。ただし、原文の、カタカナはひらがなに、旧字体は新字体に変えている。

> 遊動事務員の制定を設くること。
>
> 従来公務に従事するものは総べて一定の官衛内に於て一定時間執務すべきことを規定せられ、本院の事務員も亦この規定を適用せられ、執務は全く院内に於てこれをなし。他に出で丶用務を便ずるためには毎回特に出張の手続をなさゞるべからず。然れども精神病院に入院する患者の遺伝・既往の生活状態・病的状態は家族の事情等を知るため、在院中の患者の事情を家族に知らしむるため、又在院中の患者に家族の事情を知らしめる等、外部に出て要務を便ずべきこと少なからず。此の如くせずは到底病院は患者に対し、家族に対し、一般社会に対して、その責務を尽すこと能はず。従業員中一人・二人のものが東京市内に出で丶此の如き要務を勤むることは、特別に甚だしき費途を要するものにもあらず。吾人はこの実際上の必要なる遊動事務員の制を設け以て患者の幸福を増進し家族及び社会との連絡を円滑にせんことを希望す。

また、戦前から戦後にかけて活躍した東京大学精神科の村松常雄によれば「私（村松）が最初にアメリカ（ママ）え行く前の事でしたから、多分昭和五・六年頃でしたら（ママ）ぅか、府立松沢病院に、S・S・D（社会事業部）をおくことを、当時の三宅（鑛一）院長に進言しました。その時、院長先生は賛成して下さったが、府で予算を認めて呉れず実現出来ませんでした」[23]という。

このように、少なくとも松沢病院の中では、1920年代からPSWへの関心が存在していたことが伺われる[24]。

もっとも、わが国におけるPSWに関わる本格的な議論は、既に紹介した1930年の第1回国際精神衛生会議以降といえるだろう。この会議には日本代表として、三宅鑛一（東京大学）と植松七九郎（慶應義塾大学）の二人の精神科教授が出席した。会議の翌年の1931年に創刊された雑誌『精神衛生』の記事「第一回精神衛生国際会議の収穫」[25]には、彼らの出席について「本邦の精神衛生の歴史に特筆大書すべき事項」とある。さらに、討議内容を紹介した「精神衛生関係の社会事業」のなかで「各国は精神衛生ソシアル・

ワーカーの練習に必要なる施設をなすべきこと。此練習は特殊学校の社会的例別作業（ケース・ワーク）の基本課程たるべきこと。課程には精神病関係社会事業に須要なる精神病学、心理学、内科学の大意を含むべきこと。以上の課程には学説と実地練習とを並行せしむべきこと。以上の課程に入学するものは高等専門学校若しくは大学卒業若しくは之と同等の素養あるものたるべきこと」などと、今日の精神保健福祉士法が規定する精神保健福祉士の国家資格にも通じる内容が書かれている。

村松常雄も雑誌『精神衛生』でPSWやその業務内容について積極的に発言している[26]。「精神衛生相談なる事業は精神衛生運動の実際的仕事として最も重要なるものの一つであって、精神の健康、異常、疾病其他に関する一切の相談に応じ、鑑別、診断、処置等を行ふが、原則として医療は行わない建前を普通とすることは他の健康相談に於けると一般である」と述べ、「右の事業のためには精神科専門医師の外に、精神衛生の教育訓練を受けた社会婦、又は保健指導婦、又は公衆看護婦を必要とする」という。村松常雄はアメリカ留学中（1933～1935年）にはアドルフ・マイヤーやビアーズとも親交があり、アメリカの精神衛生事業とその担い手としてのPSWの役割に着目していた[27]。

村松の帰国後、1936年3月に個人の寄付金によって東大医学部附属脳研究室が創設された。同年5月、村松の考案により脳研究室に児童研究部を設け、“social worker”を配置し、相談や家庭訪問を行わせていたという[28]。翌1937年3月に開催された「脳研究室開設一周年研究報告会」では、東大を退官した後、脳研究室の主任となった三宅鑛一の挨拶につづいて、村松が演壇に立ち「此一年間に於ける本（研究）室児童相談部の概況」について報告している[29]。また、村松は1936年10月に東京市の京橋保健館内に精神衛生相談部を設置した。「これが恐らく当時我国唯一の成人をも含めての精神衛生相談所であった」という[30]。

Ⅲ　戦後（1960年代まで）の日本におけるPSWの展開

だが、PSWの本格的な導入は第二次世界大戦終結後である。1948年4月、将来的に国立の“Mental Hygiene Center”とすることを条件に国立国府台病院の院長に就任した村松は、ここに国立病院で最初の医療社会事業部門を設置した[31]。臨床チームの一員として、看護師の橋本繁子氏と関川美代氏を「社会事業婦」と呼んで配置し、これがわが国におけるPSWの嚆矢といわれている。1952年には、国府台病院に隣接して国立精神衛生研究所が開設され、精神科医や心理学者などからなる臨床チームの構成員として7人のPSWが採用された[32]。「国府台学派」と呼ばれた国府台病院と精神衛生研究所での活動は、アメリカで主流になっていた診断主義ケースワーク理論に強く影響を受けていたという[33]。

一方、それより前の1950年3月、村松は国府台病院から転出し名古屋大学医学部精神科教授に着任した（図2参照）。村松は同医学部公衆衛生学教室教授の野辺地慶三とともに、医療社会事業部の設置を文部省に要求したが認められず、アメリカのロックフェラー財団から“Training Center in Psychiatry”の整備費として1951年7月より3年間にわたる助成金7000ドルを得て、精神科に医療社会事業部をつくった。そのスタッフ（PSW）として、国立国府台病院で精神科の看護師として働いていた金子寿子を迎えた[34]。1951年7月のことである。金子は当時の様子を「私は同年（1951年）の6月26日に東京駅から東海道線に乗り8時間かかって名古屋に到着した。名大病院前にある名古屋市公会堂には、星条旗が翻るアメリカ占領下にある暑い夏の日であった。翌27日、私は、栄町、丸栄デパート前のビアガーデンで、中野敬次郎医局長をはじめ諸先生に歓迎していただいた。（中略）当時、『ソーシャルワーカーって、何する人？』と私はよく聞かれたが、理解させるのに、とても苦労したことを

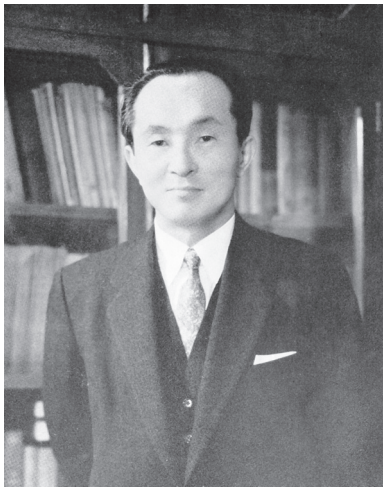

図２　村松常雄（1900–1981）
名古屋大学医学部教授時代
（撮影は1960年３月25日）
出典：村松教授還暦記念誌（1960年）

思い出す。それは当時、ソーシャルワーカーは専門職としての日も浅い上に、私自身、職業的アイデンティティが不確実であった、ということとも大いに関係していた」[35]と書いている。

その後も文部省に対し医療社会事業部の定員要求が続けられ、ロックフェラー財団からの助成が満期終了する前の1953年8月に、人員2名が認められた（PSWとして金子寿子、臨床心理士として星野命氏）[36]。こうしてPSWの業務が精神科に常設された（図3参照）。

村松の構想はPSWの教育にもわたっていた。彼が「ソーシャル・ケースワーカー養成の殿堂」[37]とすべくその設立に奔走したのが1953年に名古屋市昭和区に誕生した中部社会事業短期大学（日本福祉大学の前身）である。当時、社会福祉従事者を養成する専門教育機関は、日本社会事業短期大学と大阪府立社会事業短期大学の2か所のみだった[38]。宗教家で学園創設者の鈴木修学を支え、村松は大学の基本構想、カリキュラム、教員計画に中心的な役割を果した[39]。1955年に最初の卒業生が誕生し、名古屋とその周辺の病院や施設にPSWとして就職した者は多い[40]。

一方、名古屋大学精神科では、1953年からフルブライト奨学生として2年間医局に滞在していた人類学者G・デボス（George DeVos）の夫人で、シカゴ大学出身のソーシャルワーカーであったというウィニー[41]を囲んでケースワークの研究会をはじめている。当時の様子を金子寿子は以下のように述べている[42]。

> 1953（昭和28）年から1955年まで、村松（常雄）先生を中心とした「日本人の文化とパーソナリティーに関する研究」が始まりまして、フルブライトの交換研究員として心理学者[43]のジョージ・デボスが来日しました。その夫人のウィニさんがシカゴ大学出身のソーシャルワーカーで卒後5年間の実務経験者であることが解り、通訳つきでケースワークのプロセスについて、事例を通して学びました。浅賀（ふさ）先生も時々きて通訳をして下さいました。その後、この会は「東海PSW研究会」に発展したのです。

デボス夫妻が離日したあとも、この研究会は細々と続けられた。会は何度か存続の危機を迎えたようだが、1962年には東海地区PSW研究会として、1967年には東海PSW研究会として再発足した[44]。

他方、MSW（医療社会事業、medical social work、

図3　名古屋大学病院精神科の旧病棟（撮影は1958年）
出典：開講80周年記念誌（1988年）

あるいはその担い手としてのmedical social worker）の分野に目を向けると、早くも1950年には愛知県では全国に先駆けて愛知県医療社会事業家協会が組織されている。やがて1953年に、浅賀ふさ、中嶋さつきらが中心となって日本医療社会事業家協会が結成される[45]。MSWの組織化はPSWよりもはるかに進んでいたのである。1958年には日本医療社会事業協会へと名称が変わり、その組織も変更された。従来、PSWはMSWとともに活動をしてきたが、このMSWの改組を契機にPSWとしての全国組織化への機運が高まったという[46]。

東海地方のPSW研究会が発足した後、全国的なPSWの職業集団としての意識の高まりを背景に、各地でPSWの組織化が進んでいった。やがて、1963年8月、全国から76人が参加して日本社会事業大学でPSW全国集会が開かれた。この集会の開催趣旨について、当時東京の精神病院でPSWとして勤務していた見浦康文は次のように回想している。

> 当時、厚生省公衆衛生局および医務局の両局にまたがる医療関係に従事するソーシャルワーカーの、身分・業務内容を制度化しようとする動きが、厚生省内にあり、近々に立法化の傾向があって、公衆衛生局保健課を中心に、指針の原案が出来上がった。これに関連して、精神衛生課を所管課とする関係機関、施設（精神衛生相談所・精神病院・クリニックなど）に従事しているソーシャルワーカーの身分を規制することの可否について、現場にいる人たちの全国的な意見を聴取するとのことであった。PSWの方も、何らかの統一見解をまとめて、精神衛生課

へ答申することが急務であると考えていた[47]。

全国集会では、PSWの資格身分制度、教育養成、業務内容、組織化の問題について討議され、「全国に散在していたPSWが一堂に結集し、全国組織化へ向けての積年の願望が一挙に盛り上がった」という。後日、見浦らは全国集会の報告のために厚生省精神衛生課を訪れ、PSWの身分法などの立法化については、現場の意見を十分反映させることを陳情した[48]。

さらに翌1964年10月には再び日本社会事業大学で「日本精神医学ソーシャル・ワーカー協会設立のための関東甲信越地区集会」が開催され、村松常雄が特別講演「我が国における精神医学ソーシャルワークの発展の歴史と将来への期待」を行った。見浦によれば「アメリカの病院では、入院時のフロント業務から、アフターケアまで、多くのクリニッシャン[49]が働いているといった話であって、当時、医事課に所属していて、疎外感をもっていた私には「目から鱗が落ちる」思いであった」[50]という。

次いで、1964年11月には仙台で設立総会が開かれ、「日本精神医学ソーシャル・ワーカー協会（現在の日本精神保健福祉士協会）」が発足した。そして1965年5月、東京で第1回日本精神医学ソーシャル・ワーカー協会全国大会が開催された。

ところで、既に述べたことだが、金子寿子は名古屋大学精神科に赴任した当初から「職業的アイデンティティが不確実であった」と述懐しているように、1950年代、1960年代にはPSWの職種としてのアイデンティティをめぐる議論が活発に行われていた。PSWの黎明期について児島美都子は次のように述べている。

> 周知のように、日本の精神医療は、1950年代後半に始まる向精神薬の登場で治癒可能な病気となり、作業療法や生活療法が普及する中で1965年精神衛生法が改正される。それまでの入院主義から通院と社会復帰支援が強調され、精神衛生センターや精神衛生相談員を都道府県に設置する規定ができた。こうした動きに呼応して公立病院や民間病院にもPSWが誕生した。その多くは福祉系大学の卒業生であった。新任のPSWたちは、大学で教えられた人権としての福祉学と現実との乖離に悩み、そこから抜け出そうともがいていた。悪徳精神病院を告発するマスコミの動きもあった。そこに似た状況は身近かにころがっていた。「やましい思いをしないで飯が食いたい」とうめくように口にした若いワーカーの言葉は、私のこころに深く刻み込まれた。PSWとは名ばかり、現実は便利屋的存在であり、PSWは業務も不明確で、いま風に言えば、医学モデルの中にどっぷりつかっていた[51]。

そんな中で提起されたのが「同じ精神医療の仲間である精神科医から発せられたPSW不要論」であるという。上記の1965年の第1回日本精神医学ソーシャル・ワーカー協会全国大会で岡田靖雄（当時、東京都立松沢病院医師）の行った特別講演「精神医療におけるPSW」[52]の内容が、「PSW不要論」と受けとられたようである。

岡田はいくつかの「精神科ソーシャル・ワーカーへの希望」を述べている。まず、「チームワーク」に関して、「特に臨床心理技術者といわれる方々が、病院で鼻つまみになっていることをしばしば聞きます。例えばある患者さんについて、心理療法をやっているから薬はやらないでくれとか、生活療法に参加させないでくれといい出すとか、あるいはつまらないことですが、先生といわれない、看護者が先生と呼ばないので機嫌が悪いというようなことを聞きます。つまりあまり肩をはらずにみなさんとやっていただきたいと思います」と（ここで言う「臨床心理技術者」には、当時のPSWも含まれていたと考えられる）。さらに「現実の直視」に関して、「医療、特に精神医療とは泥まみれの、いわば、はいつくばった経験主義といった面が非常に強く、他の分野から見ますと、理論が無いに近い状態と思われます。（中略）このごろのソーシャル・ワーク関係の人が分裂病の患者さんの家族の問題を精神分析の言葉などを使って、いかにもカッコよく、わかったように書いているのを見ることがありますが、我々はそういうものを読みますと、こんな風に考えることが出来るのかなと言って眉に唾をつけたくなるのです」と述べている。この講演を骨子にしたと思われる論考「精神医療におけるソーシャル・ワーク：精神医学ソーシャル・ワークは必要か」[53]も、「PSW不要論を唱える岡田靖雄」という印象を強めた可能性がある。実際はどうだったのだろうか。岡田から著者（橋本）への私信（2006年10月）によれば、上記の児島美都子は岡田がPSW不要論を唱えたと主張しているが、自分としてはPSWの方向性をあきらかにしてほしいと述べたつもりだったという。

岡田の真意がどうあれ、当時のPSWによって受け

取られた「PSW 不要論」に対して、PSW の坪上宏（当時は国立精神衛生研究所技官、のちに日本福祉大学教授）は、「反論・ソーシャルワーカーは果して不要か」[54]で岡田靖雄の発言に対抗している。岡田論文にある「いわゆる精神医学ソーシャル・ワーカーといわれる人たちに対する問題点の指摘」については、「弁明とか反駁する気にはなれない」が、感じたこととして、「病院その他の機関で肩をはりすぎているとか、なまはんかな心理主義にもとづいた心理療法をもって精神科医の受診受療から患者を遠ざけたとか遊び半分で仕事を途中でなげだして医療チームの他のメンバーに尻ぬぐいをさせたとかについては（中略）べつに医療の分野にかぎらずどの世界においても通用しがたい未成熟な態度であって、社会人として基本的なしつけの不足を指摘されたもの」と書いている。他方、坪上は、「患者さんの生活行動の面に焦点をあわせて社会生活への適応を考えるとき、患者さん個人の心身に対する働きかけと患者さんの行動環境に対する働きかけの重要さは等価だと考えています」と述べ、PSW の患者への働きかけの意味を強調している。

名古屋大学精神科の金子寿子は、この頃の論争の意味を自分の PSW 遍歴に照らしながら次のように回想している。

> 顧みるに、当時の名古屋大学精神科医局の雰囲気は、稀に見るほど新しい職種の人々を入れて、訓練・養成をしようと民主的なはしりであった。SW も CP も精神科医の中で見習い、未熟でありややもすれば医師の見方に同一化していたように思う。
>
> 村松先生はわが国に精神科ソーシャルワーカーの必要性を早くから説かれ、配置されるべく努力された最初の一人である。浅賀ふさ先生が学ばれたのは、アメリカのシモンズ大学であり、後に村松先生と同じボストン・ハーバードで教育学を学ばれた。（中略）彼女もアメリカ的ソーシャルワーカーであったように思う。
>
> 筆者が SW になろうとした初期の先生は、アメリカでソーシャルワークを学んだアメリカナイズされた先輩諸氏であった（中略）当時（1965年 5 月）、第 1 回日本精神医学ソーシャルワーカーの特別講演で、精神科医の岡田靖雄先生は、日本の精神病院の歴史と実情を述べられた。そしてミニ精神科医にならないようにと忠告された。そのことにより筆者の初期の「医学モデル」は「生活モデル」への一つの転換点となった[55]。

上記引用文中の「ミニ精神科医」とは、minor psychiatrist[56]のことだろう。（力動）精神医学的アプローチを強調するあまり、PSW が精神科医の単なる亜流に堕してしまうことへの批判的な言説である。minor psychiatrist の問題は名古屋大学精神科に限られたことではなかった。同じ頃、PSW 養成の東の中心地、千葉県の国立国府台病院および国立精神衛生研究所でも顕著であったという。既に述べたように、「国府台学派」と呼ばれた当地では、フロイトの精神分析を実践理論としたアメリカ流の診断主義的ケースワークが主流をなし、PSW の治療的な面接が重視されていた。だが他方では、社会福祉方法論の研究者や実践家の間で、このようなケースワークは心理的に偏向していると批判もされ、むしろ生活上の諸問題や制度的な側面など、社会状況の分析に重きを置くべきだとの主張もなされていた[57]。

20世紀初頭のアメリカの歴史でも見たように、PSW 養成の初期段階において精神科医が主導的な役割を果たしてきた。アメリカにならったわが国の流れも同様であり、PSW が minor psychiatrist に傾くのは必然かもしれない。

このように、初期の PSW は精神分析的、人間関係論的、心理社会的なクライエントへの働きかけを指向していたが、いまや生活・福祉的なアプローチへの転換が模索されていた。金子が述べる「医学モデル」から「生活モデル」への変化は彼女一人のものではなく、むしろ1960年代の日本の PSW 全体が一つの分岐点に立っていたことを象徴している。

おわりに

本論を終えるにあたって、いくつかの課題を述べておきたい。まず、アメリカの PSW の歴史記述から始めたが、わが国の PSW の展開にどれくらい影響を与えたのかを十分に示したとは言えない。村松常雄が戦前戦後に重要な役割を果たしたことは確かだが、村松以外にもアメリカの動向に注目していた人物は当然考えられる。また、村松を中心に PSW の歴史に着目したため、もっぱら名古屋周辺での活動が多く描かれる結果となった。したがって、村松が去った後の国立国府台病院および国立精神衛生研究所での PSW 養成の記述が脱落している。さらに、PSW の職業的アイデンティティに関する議論については、金子寿子、岡田

靖雄、坪上宏の記述に依存している。だが、近年の福冨律の研究[58]は、村松常雄および名古屋周辺のPSWの展開とは異なる歴史記述の可能性を示唆している。いずれにせよ、これらの課題については、いずれ稿を改めて検討することにしたい。

さて、その後のPSWの職業的アイデンティティ形成に一定の役割を果したと考えられるものに、いわゆる1960年代の終わり頃に端を発する「Y問題」がある[59]。これは、日本精神医学ソーシャル・ワーカー協会に所属する保健所の精神衛生相談員が、相談に訪れたYという人物の母親の話から、「精神病である」という予断によって、そのYを強制入院させてしまったという問題をさしている。日本精神医学ソーシャル・ワーカー協会の内部では、「Y問題」の処理をめぐって自己批判的な長い議論がつづき、1982年にこの協会が出した札幌宣言に事態収拾の活路を求め、PSWの専門性の確立を目指した。その宣言とは、対象者（精神障害者）の社会的復権と福祉のための専門的・社会的活動を推進する、というものである[60]。しかし、日本精神医学ソーシャル・ワーカー協会が組織された時からの悲願であったPSWの国家資格化は、1982年の札幌宣言からさらに15年の歳月を必要とした。

［付記］

本論文の内容は、著者の大学における担当講義「精神保健福祉論」の資料、および二つの学会発表（橋本明：わが国における精神科ソーシャルワーカーの黎明（その1）、第109回日本医史学会総会（2008年6月、佐倉市）および橋本明：わが国における精神科ソーシャルワーカーの黎明（その2）、第110回日本医史学会総会（2009年6月、佐賀市））にもとづいている。

また、本論文は岡田靖雄および金子寿子の両氏からいただいた資料に負う部分が大きい。この場をかりて改めてお礼申し上げたい。

注

1）精神病患者の社会的なケアという点から言えば、これより早くイングランドでは「狂人アフタケア協会（The Society for the After-Care of the Insane）」が組織されており、すでに1880年には病院からの退院患者の面倒をみるための活動が行われていたという。cf. Southard EE, Jarrett MC: The Kingdom of Evils. 520, Macmillan, New York (1922) [Reprint: Arno Press, New York (1973)].

2）Southard EE, Jarrett MC: *op. cit.* 520.

3）Hurd HM: The Institutional Care of the Insane in the United States and Canada, Volume II. 653, The Johns Hopkins Press, Baltimore (1916) [Reprint: Arno Press, New York (1973)].

4）Southard EE, Jarrett MC: *op. cit.* 521.

5）1871年に創立されたアメリカ有数の女子大学。2012年現在、約2800人の学部学生が在籍。cf. http://www.smith.edu/

6）Southard EE, Jarrett MC: *op. cit.* 521−522.

7）Reynolds BC: The Role of the Psychiatric Social Worker in Therapy. In Proceedings of the First International Congress on Mental Hygiene, Volume One, ed. by Williams FE, 668−689, The International Committee for Mental Hygiene, New York (1932).

8）原文では“just an assistant to the physician, somewhat like a nurse”と書かれている。今の看護師なら反発するかもしれない。

9）原文では“a group of trained women developing a professional point of view of their own”である。最初からPSWを女性の仕事と捉えていたようである。

10）Southard EE, Jarrett MC: *op. cit.* 522.

11）Sicherman B: The quest for mental health in America 1880−1917. 304, Doctoral thesis, Columbia University (1967) [Reprint: Arno Press, New York (1980)].

12）ビアーズのかたわらで、マイヤーは丸々4晩を原稿のチェックに費やしたという。cf. Sicherman B: *op.cit.* 298.

13）Beers CW: A Mind That Found Itself: An Autobiography. Longmans, Green, New York (1908). なお、邦訳ははじめ1940年の『救治会々報』59号および60号に掲載され（加藤普佐次郎訳）、1949年には『わが魂にあふまで』（加藤普佐次郎・前田則三訳、羽田書店）のタイトルで単行本が出された（cf. 図説日本の精神保健運動の歩み．77, 日本精神衛生会，東京 (2002).）。1980年には新たに『わが魂にあうまで』（江畑敬介訳、星和書店）が訳出されている。現在では、以下のURLで原文の全テキストを閲覧できる（http://www.gutenberg.org/files/11962/11962-h/11962-h.htm）。

14）Proceedings of the First International Congress on Mental Hygiene, Volume One 口絵参照。

15）Sicherman B: *op.cit.* 306.

16）Luxenburger H: Die Bedeutung der Psychischen Hygiene (mental hygiene) für die Erbkrankheiten. Archiv für Rassen- und Gesellschaftsbiologie, 24: 307−325 (1930).

17）アジア大陸を代表してスピーチをしたのは、日本の代表として出席していた東京帝国大学教授の三宅鑛一であった。cf. Proceedings of the First International Congress on Mental Hygiene, Volume One, 29−30.

18）Proceedings of the First International Congress on Mental Hygiene, Volume One, 22.

19）Proceedings of the First International Congress on Mental Hygiene, Volume One, 689.

20）Elizabeth Healy のコメントより。cf. Proceedings of the First International Congress on Mental Hygiene, Volume One, 691.

21）東京府立松澤病院医局同人 : 東京府松澤病院ノ歴史．呉教授在職二十五年記念文集 第三部，1–106，東京 (1928)．ただし、「将来ノ企画」は同論文の90–94頁。

22）岡田靖雄 : 精神医療における PSW．精神医学ソーシャル・ワーク，1(1): 4–9 (1965).

23）座談会『医療社会事業』をめぐって．精神衛生，45: 12–15 (1956).

24）村松の進言以降、当時松沢病院副院長だった齋藤玉男は、「院外療護」の主務者として「精神衛生社会看護婦」を挙げている。これも PSW を意識したものと思われる。（cf. 齋藤玉男：現在の精神病診療機関の運用は停止したエスカレーターに比較出来るのではないか．脳，7(2) (1933)．ただし本論文で参照したのは、『八十八年をかえりみて—斎（ママ）藤玉男先生回顧談—』（大和病院，1973）に再掲されたものである。）

25）第一回精神衛生国際会議の収穫．精神衛生，1: 15–21 (1931).

26）村松常雄：精神衛生相談の事業に就いて．精神衛生，11: 24–26 (1937).

27）村松常雄，佐藤壱三：対談 社会精神医学の先達にきく．社会精神医学，0（創刊準備号）: 20–29 (1978)．村松はアメリカに 1 年半あまり滞在したあと、ヨーロッパに渡った。その際、ベルギーのゲール（Geel）の精神病者コロニーを訪れた。著者（橋本）の調査によれば、ゲールの公立精神医学ケアセンター（OPZ）に保存されているコロニーの見学者名簿により、村松のゲール訪問が1935年 5 月30日であることが確認できた。この名簿には、ビアーズがゲール・コロニーの院長 F・サノ（Fritz Sano）に村松を紹介した手紙が添付されている（cf. 橋本明：Geel コロニーの見学者名簿の分析，精神医学史研究，7(2): 121–133 (2003).）。

28）村松教授還暦記念誌．73，名古屋大学精神医学教室内村松教授還暦記念会，名古屋 (1960)．なお、この脳研究室の運営に不満を持っていた当時の東大精神科の教授・内村祐之は「ついには非公式ながら精神衛生の相談までが始められるといった次第」と、その活動をネガティブに捉えていたようである（cf. 内村祐之：わが歩みし精神医学の道．166，みすず書房，東京 (1968).）。

29）脳研便り．精神衛生，11: 61–62 (1937).

30）村松常雄：精神衛生 訂正第 4 版．82，南山堂，東京 (1960).

31）村松教授還暦記念誌，73–74.

32）日本精神保健福祉士協会40年史．18，日本精神保健福祉士協会，東京 (2004)．この 7 人の“PSW”は、正式には当時どのような名称（職種）で雇用されたのかは、判然としない。高木四郎によれば「医師であっても、医師以外のしかるべき人たちであっても、これを雇員や傭人として採用するわけにはゆかない。雇傭人は助手や新制大学新卒のケースワーカーで埋めることにして、技官十一の席にそれら専門の異なる人々を配置しなければならない。」（高木四郎：國立精神衛生研究所の設立当時を顧みて．村松教授還暦記念誌，37）とあるので、PSW は経験に応じて、技官としてまたは雇員・傭人として雇用されたということなのだろうか。

33）柏木昭編著：三訂 精神医学ソーシャルワーク．11，岩崎学術出版社，東京 (1996).

34）当初は国立国府台病院の橋本繁子がリクルートされていたようである。当時のことを金子は次のように書いている。「国府台病院ですでに PSW として勤めておられた橋本繁子さんという大先輩（今は亡くなられていますが）から、『私が名古屋に来るようにと言われたけれど、私はもう年だし、貴女が若いから行って勉強しては』と勧められ、そんな気になって履歴書を送りました。幸い受け入れて頂き、名古屋大学の精神医学教室にまいりました。」（cf. 金子寿子：私の辿った道をかえりみて．日本社会福祉実践理論学会研究紀要，5: 1–12 (1996)．引用部分は 2 頁。）

35）金子寿子：医療社会事業部．開講80周年記念誌，22–29，名古屋大学医学部精神医学教室開講80周年記念誌編集委員会，名古屋 (1988)．引用部分は22–23頁。

36）教室五拾年史．16，名古屋大学医学部精神医学教室，名古屋 (1958) には、「同年（1954年）4 月 Rockefeller 寄金の満期と共に Social Service Department 及び Department of Clinical Psychology は国家予算に移管された」とあるが、本論文では金子の記述（開講80周年記念誌，28）にある「ロックフェラー財団からの助成が満期終了する前」を採用した。

37）山根常男：人間関係総合研究班と村松教授．村松教授還暦記念誌，43–48.

38）日本福祉大学50年誌．24，日本福祉大学，美浜町 (2003).

39）日本福祉大学50年誌，27–28．なお、鈴木修学（1902–1962）は愛知県に生まれ、日蓮宗の僧侶であり、ハンセン病の療養所の活動に関わるなど社会事業家として知られている（cf. 日本仏教社会福祉学会編：仏教社会福祉辞典．188，法藏館，京都 (2006).）。

40）金子寿子の記述によれば、1955年以降、名古屋大学

精神科は中部社会事業短大の学生の実習場となり、彼らの卒業後の就職先として、岐阜精神病院、三重県立高茶屋病院、あすなろ学園、東春病院、愛知県立城山病院、守山荘病院、北林病院が挙げられている（cf. 開講80周年記念誌，23）。

41）ウィニー（Winnie）夫人とはWinifred Olsenである。1974年にGeorge DeVosとは離婚している。cf. http://universityofcalifornia.edu/senate/inmemoriam/GeorgeAlphonseDeVos.html

42）金子寿子：私の辿った道をかえりみて．引用部分は3頁。

43）George DeVos（1922–2010）は、1965年にカリフォルニア大学バークレー校の教授に就任し、1991年に同校を退任している。ポストは人類学の教授だったが、心理学や社会福祉学の領域でも活躍した（cf. http://universityofcalifornia.edu/senate/inmemoriam/GeorgeAlphonseDeVos.html）。金子寿子の記述に「G. デヴオス（後にバークレイ校教授）が当教室に来られたので、もの珍しさも手伝って、医局の殆ど全員が彼から、ロールシャッハテストとT.A.Tの手ほどきを受けた」（開講80周年記念誌，24）とあるように、名古屋大学精神医学教室での彼の肩書きは「心理学者」だったようである。

44）金子寿子：東海PSW研究会前史―黎明期―．第42回日本精神保健福祉士協会全国大会記念誌，19–32，愛知県精神保健福祉士協会, 名古屋（2006）．当時は「P.S.W.」「P.S.W」などとも書かれていたようだが、本論では「PSW」の表記に統一している。

45）森井利夫：40年前の追想―日本精神医学ソーシャル・ワーカー協会設立のころ―．精神保健福祉，35(2): 115–118 (2004).

46）柏木昭：精神保健福祉実践（精神科ソーシャルワーク）の歴史と今後．（昼田源四郎編）日本の近代精神医療史，31–38，ライフ・サイエンス社，東京（2001）．

47）見浦康文：PSWとしての40年の歩み―必要とされる職種への道―．東京PSW研究，4: 11–32 (1995)．引用部分は21頁。

48）見浦康文：同上論文.

49）講演の際に村松常雄は、ソーシャルワーカーのことを「ソーシャル・クリニッシャン」という言葉で説明したという。したがって、ここでいう「クリニッシャン」はPSW（および臨床心理のスタッフ）のことを指していると考えられる。

50）見浦康文：前掲論文，23.

51）児島美都子：発刊に寄せて（東海PSW協会回顧）．第42回日本精神保健福祉士協会全国大会記念誌，10，愛知県精神保健福祉士協会，名古屋（2006）．

52）岡田靖雄：精神医療におけるPSW．精神医学ソーシャル・ワーク，1(1): 4–9 (1965a).

53）岡田靖雄：精神医療におけるソーシャル・ワーク：精神医学ソーシャル・ワークは必要か．医療と福祉，2(10): 8–12 (1965b).

54）坪上宏：医療におけるソーシャル・ワーク：反論・ソーシャル・ワークは果して不要か．医療と福祉，2(12): 7–11 (1965).

55）金子寿子：東海PSW研究会前史―黎明期―，20.

56）岡田靖雄：前掲論文（1965b），12.

57）柏木昭編著：前掲書，11.

58）福冨律：「精神医学」誌から見えるPSW像．立教大学コミュニティ福祉学研究科紀要，10: 69–74 (2012).

59）「Y問題」を扱った資料は極めて多いが、事件の概要を知るには、たとえば以下の文献を参照。村山隆彦：Y事件におけるセンターメモの果たした役割と相談のあり方を問う．精神医学ソーシャル・ワーク，12(18): 8–10 (1978)．あるいは、坪上宏：PSWの歴史と現状―その倫理的側面から―．精神医学ソーシャル・ワーク，29: 75–85 (1992).

60）社団法人日本精神保健福祉士協会事業部出版企画委員会編：日本精神保健福祉士協会40年史．190，日本精神保健福祉士協会，東京（2004）．